



越境人

特集2 対談

# 21世紀の教育「生き抜く力」

コリア国際学園（KIS）が設立されて、今年2年目を迎えています。  
今後のKISの向かう方向や子どもに対する教育観などについて、  
KIS理事の寺脇研さんと校長の洪孝子さんに対談形式でお話を伺いました。

**実現していく時代だ。**  
**21世紀は協調・共生によって、平和と幸福を**

(寺脇)

食料もエネルギー資源も有限であることはもちろん、昨年（2008年）行われた北海道洞爺湖サミットでは、2050年までに世界全体が環境問題をめぐって有効な手立てをうたないと、地球自体が危ないとさえ言われているわけです。ですから、21世紀は、世界各国がそれぞれの役割を行い、協調・共生することによって、人類の平和と人々の幸福を実現していかなければならぬ時代であると思います。KISが目標しているのは、東アジアから、そうした考え方を持った越境人を育てていくことです。境界をまたぐ越境人

洪

これから時代は「競争」ではなく「共生」の時代だということに私も同感です。資本主義社会が成熟する中で、物があふれすぎて、極端に言うと、物質的豊かさがかえつて心の貧しさを生み出しているのではないかとさえ思います。そのような社会状況の中で、いま子どもたちの「生きる力」と「学ぶ力」が真剣

寺脇 歴史を振り返ると、19世紀から20世紀にかけては「競争の時代」であると言えます。この時代は、競争によって平和がもたらされるという「勘違い」がありました。

というあたり方は、共生という考え方とつながりますよね。

たとえば、近い未来に南北コリアが統一したときに、統一コリアは世界やアジアの中でのような役割を果たさなければならず、日本とどの

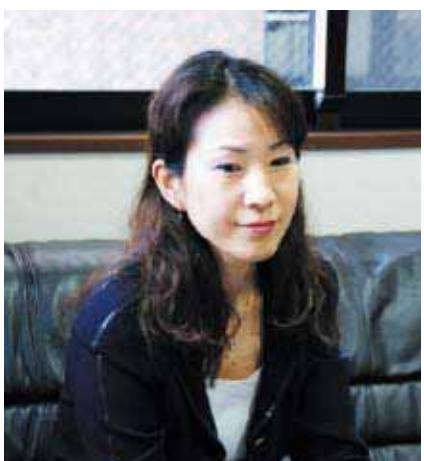
ような関係を創っていくのかということがあります。もとよりこれから

の激変する時代を考えると、時代変化に取り残されない「生き抜く力」を育んでいくことが次世代には不可欠です。KISの生徒には、そのレベルを超えて越境人としての新しい生き方のモデルを示してほしいと期待しています。KISがチャレンジしようとする教育とは、まさに21世紀の未来を先取りした教育だと思いません。

KISの生徒には、そのレベルを超えて越境人としての新しい生き方のモデルを示してほしいと期待しています。KISがチャレンジしようとする教育とは、まさに21世紀の未来を先取りした教育だと思いません。

洪 孝子

寺脇 研



私は神戸で生まれ育ち、1995年に起きた阪神淡路大震災を経験しています。その経験は、私だけではなく、多くの人にとって人生をがらっと変えるほどの本当に衝撃的な出来

に問われています。確かに、人間は必要性があるから頑張るし、問題があるから解決しようとするけれど、一旦問題がクリアされれば、いつまでもその問題にしがみついているのではなく、新たな課題や目標を見つけないといけないのに、いまだ多くの人々が、人の幸せとは物質的な豊かさであると認識しているところ

私は神戸で生まれ育ち、1995年に起きた阪神淡路大震災を経験しています。その経験は、私だけではなく、多くの人にとって人生をがらっと変えるほどの本当に衝撃的な出来

事でした。そのときに根源から問われたのは、「豊かさとは何か」というテーマでした。人の幸福＝お金ではなく、まさに人と人とのつながりであることを、6,800人以上の死を通して実感させられた時代のひとコマだったと思います。当時の被災地では、みんなが大災害に立ち向かう具体的な過程の中で、互いに協力しあって、自立した市民社会、コミュニケーションニティ意識を作り上げていこうと懸命でした。

これから時代、子どもたちの「生きる力」と「学ぶ力」は、やはり心の問題であり、内面的な豊かさをどう充実させていくのかが問われています。その上で、KISの理念である「多文化共生」「平和と人権」「自由と創造」は大切なテーマであり、そして、社会的財産としての福祉、医療、環境などの地球的テーマにもどう向き合うのかが、切実に問われていると思います。

**寺脇** 被災するまでの神戸は、最先端の近代都市ですよね。ある意味、破壊された神戸の街は、近代の

物質文明の行き詰った姿を象徴して

## 環境などの地球的テーマにもどう向き合うのかが、切実に問われている。（洪）

事でした。そのときに根源から問われたのは、「豊かさとは何か」というテーマでした。人の幸福＝お金ではなく、まさに人と人とのつながりであることを、6,800人以上の死を通して実感させられた時代のひとコマだったと思います。当時の被

災地では、みんなが大災害に立ち向かう具体的な過程の中で、互いに協力しあって、自立した市民社会、コミュニケーションニティ意識を作り上げていこうと懸命でした。

アジアの近代化が欧米と比べて遅れた分、実は、この東アジアにこそ21世紀を生きていく深い知恵が残されているのかもしれません。だからこそ、KISが目指している東アジアから世界へ向けて新しい越境人を育成していくこととする方向は、時代に沿った意義があるのだと思います。

**洪** 学校教育を考える際に、ゴルがどんな大学に進学するのかといふことに、あまりにも焦点が集中されているために、教育内容に構造的な歪みが生じ、「学ぶ力」を育成する上で障害があると感じています。中高の時期は、子どもたちが今後社会に出て、どのような夢を実現し、また社会的な役割を果たしていくため、どのような夢を実現したいのか、を発見する重要な時期であると思います。そうした目標や問題意識の延長線上として、大学、専門



学校、あるいは就職などの進路の選択肢があるのだと思います。

時代が抱えるリアリティのある、さまざまな課題について知り、学び、深めるために学校の内と外の多様なネットワークを最大限活用することで、子どもたちの「学び」の場を創っていくことが、KIS教育の最も重要なテーマのひとつだと思っています。

**寺脇** わたしは、KISが次のことを保護者や子どもたちに約束すべきだと思っています。「いわゆる有名大学に入学することではなくて、子どもたちが大学に入るときに、自らの学ぶ目的をはつきり持てるよう

にKISで教育します」と。

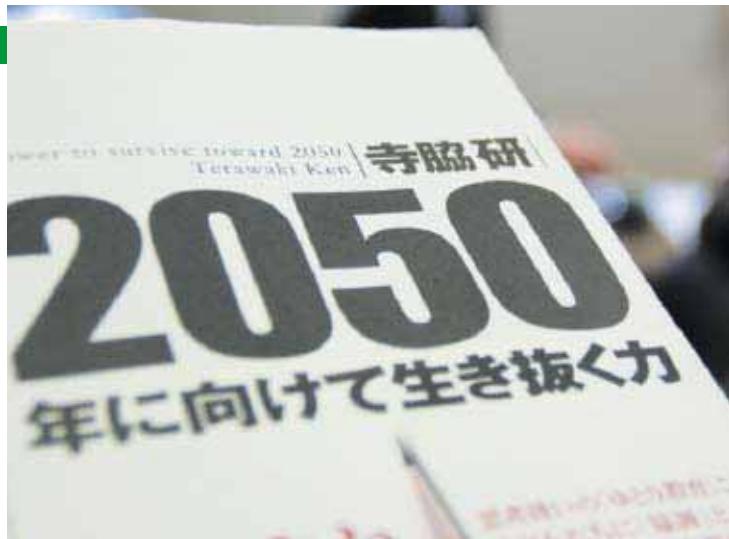
## 対談：21世紀の教育と「生き抜く力」

# 学校の内外の多様な人的ネットワークを最大限活用する。（洪）

公立の中高一貫学校の第一号は、宮崎県にある五ヶ瀬中高等学校という学校です。五ヶ瀬というのは、宮崎県の山奥にあり、人口が千何百人くらいの村です。若い人は、ほとんど年寄りがいっぱいです。そこへ寮を作り、まさにKISと同じように、先生達も一緒に泊まり込んでやつていく教育を始めました。

3年が経ちました。卒業生は、いろんな大学に入りました。その中に、京都大学農学部の林業科に入った卒業生がいました。五ヶ瀬という山奥の村に3年間暮らして、勉強も一生懸命するけれども、村のじいちゃん、ばあちゃん宅にホームステイして、その村が林業でずっと生きてきたことを知る中で、林業の勉強をして、「日本や世界の林業のために尽くしたい」と決心して京都大学の林業科に入るわけです。これだと思うのです。

KISの周りには越境人となるチャンスが、ゴロゴロ転がっていますよね。みんなで韓国に体験留学へ行ったり、また先生方もさまざま国際経験を持つています。その恵まれた環境の中で、越境人として外交官になろうと思えば、そのための大



学へ行けばいいし、越境人として国際協力NGOの「国境なき医師団」で働くといえば、とにかく医学部に入るためには頑張ればいいと思います。

**洪** つまり、知識のための知識ではなくて、まずは自分たちが住んでいる地域に目を向けて、大人には見えなくて、むしろ中高生の目線だから見える、純粹な社会に対する問題意識を大切にして、それらを解決するための知識と態度を学ぶというのが、本当の学力ですね。

「共生」というキーワードが時代の大きなテーマになっています。グローバル（地球規模）の視点からみても、ローカル（地域規模）の視点からみても、国家、地域社会、組織、学校、家庭、個人の人間関係など、様々な大小の分野においても、結局のところ「他者とのちがい」を互いに受け入れないことが、あらゆる争いを巻き起こす根底にあるのだと思います。

「他者とのちがい」を一旦は受け入れ、尊重し、理解し、同調しなくてもいいので、共存するという姿勢やチカラを育んでいくことが平和や人権や共生を実現していくことに結びついていくと思います。しかし、何事もそうであるように「言うは易



## 対談：21世紀の教育と「生き抜く力」

**自らの学ぶ目的をはつきり持てるようになりSで教育することが重要だ。**（寺脇）

し、行うは難し」です。

2～3歳の幼児どうしは、同じ空間で言葉を交わさず、背中合わせでも、それぞれが楽しく遊ぶことができるのです。「平和共存」は、訓練すれば幼児にもできることですか、大人も訓練さえすればできるはずだと思います。

**寺脇** その通りですね。この学校には、在日コリアン、日本人、韓国からのニューカマー、コリアンの生徒もいます。K I Sは国籍や民族など、ちがいのある生徒が集うインターナショナルスクールとしての宿命をもっています。確かに、子どもの立場から見ると、みんな同じである方が、楽で楽しいわけです。「ちがう」人がいるから、ムカついたり、喧嘩になつたり、葛藤が出てきます。

でも、みんな「ちがう」のです。世界もそうです。「ちがう」人が仲良くするのと「同じ」人が仲良くするのとはやり方が、異なります。「ちがう」人が仲良くするために、先ほど、洪校長が言われたように、お互いの「ちがい」をまず、

はつきりさせることが必要です。そのことで一回くらい喧嘩するかもしれません。しかしそうした過程で、相手に対する理解が深まっていきます。

K I Sはインターナショナルスクールだから、日本の子どもと在日コリアンの子ども、あるいは、南北コリアンの子ども、そして中国の子どもも入学できます。もちろん、日本にもアメリカンスクールとか、インターナショナルスクールはあります。が、隣国であり、かつさまざまな過去や文化的背景を背負ってきた子どもたちどうしが集い学ぶ意味は、とても大きいと思います。

**洪** 東アジアは、韓国、朝鮮民主主義人民共和国、日本、中国、米国の東アジアという地域の政治的課題についても、向き合っていける子どもたちになつてほしいと思っていました。子どもたちが大人になるときには、ヨーロッパのEUのように、東アジア共同体の形成という地域課題

題も争点化し、そうした潮流が糺余曲折しながらも進展する時代となつていることを願っています。KISは、21世紀の国際舞台に羽ばたく「越境人」の育成をかけています。ひとつには、朝鮮半島を中心とした東アジアの平和と共生を実現していく人材育成の基地的役割を果たしうるといつても過言ではないのではないか。

**寺脇** EUは経済からはじまつている点に着目すべきだと思います。

今は円高・ウォン安ですが、ついこの間まではウォン高・円安で、韓国の観光客が日本にたくさん来ていましたよね。日韓間の人の往来が飛躍的に伸び、経済的な結びつきも深まっている中で、これから日韓間で、為替レートを同じにする通貨協定を結ぶというアイデアはどうでしょうか。

東アジア共同体の形成を見据えて、在日コリアンが20世紀の競争の時代に果たした役割とは、また違った新しい役割や可能性も広がっています。海外コリアンネットワークとも連携しながら、アジアを



選んだのは、子どもたちの意思が強かったからとも聞きます。中には親の反対や心配を押し切って入学してきた生徒もいます。KISの学校環境の中で、保護者も本当に驚くほど子どもたちが自立してきています。ある程度、自立した「自分」を持つた子どもが入ってきたという面もあるとは思うのですが、親とは心理的に自立した「自分」を持っているのは、ある意味「すごい」と感心させられます。

**寺脇** それは、この学校が「自分」を持つことを大切にしているからですよ。日本の学校では、逆に「自分」を持つなどいわんばかりの教育をしています。だからKISの子どもたちは、個性的でやんちゃだと言われるのならば、それは、むしろ良いことです。実は日本でもそれが大事だと分かっているのにできません。

**洪**

この4月から校長としてKISの子どもたちと直接接して、強く感じことがあります。一言で言うと、とにかく「自分」を持つていま

すね。よく保護者の方から「子どもたちから教えてもらうことが多い」と聞かされます。また、この学校を

## コリア語、英語、日本語の3ヶ国語の育成は、

この学校の「強み」だ。(寺脇)

KISが目指しているコリア語、英語、日本語の3ヶ国語の育成は、この学校の「強み」です。有名大学

歳代、40歳代になり、社会をリード



**洪** 1年後のKISの姿を想像しながら、さらに5年後10年後の時代の変化と重ね合わせてKISも成長していくのだろうと思いつつ、何よりも今いる子どもたちに最も大きな可能性を感じています。この子どもたちが社会に出て行くときに、本当にKISの素晴らしさが実証されるような学校になれるように頑張つ

していくときに、どれだけの力を發揮できるかということを見ていくべきだと思います。

**洪** そうですね。この学校が目指しているものが、未来の歴史を創るうとしている点で、先進的であるし「早すぎる」と言われるところがあると思います。しかし、これまでの過去を総括する中で、保護者や子どもニーズから生まれた必然的な学校であると、わたしは確信しています。

実際、校長として入学についての問い合わせを受けたり、保護者とお話し合ったときに、保護者の方から、「この学校は、まさに『生き抜く力』を育む学校だ」とおっしゃる方が多いです。吉田松陰は死刑になりました。その後歴史を振り返って見ると、そこで育った人材が、その時代においては大事な近代化の役割を果たしたのです。

最初から順風満帆な学校ではなくて、未来から見ればむしろ「危ない」学校ではないでしょうか。わたしが勤務する京都造形芸術大学も建学する際には、大変な苦労をしたそうです。それは新しいものを創っていくための宿命です。

する機会があり、「こんな学校ができる嬉しい」「是非、子どもを入れたい」という生の声を聞くと、やはりこの学校は潜在的なニーズとして求められているということを本当に実感します。

**寺脇** 日本の歴史で言うならば、幕末の松下村塾というのは、「早く生きる」学校であったわけですよね。だから、その校長の吉田松陰は死刑になりました。その後歴史を振り返って見ると、そこで育った人材が、その時代においては大事な近代化の役割を果たしたのです。

最初から順風満帆な学校ではなくて、未来

で、新たな歴史を創るというミッションに対して、とてもやりがいを感じています。

**寺脇** 子どもたちや自分の学校を見ると、ショートレンジで見るのか、ロングレンジで見るのか、ミドルレンジで見るのか、ロングレンジで見るのかと、評価軸があります。ショートレンジに見るのは誰もがやることで、やらない学校はありません。たとえば、今いる子どもが学校を嫌がっている状況を変えていこうとすることは誰でもやっています。学校を卒業するぐらいまでのミドルレンジで見る場合もあります。

## KISは、保護者や子どものニーズから生まれた必然的な学校だ。（洪）

### Profile

てらわき・けん ● 1952年福岡生まれ。コリア国際学園理事。現在、京都造形芸術大学教授。東大法学部卒。75年文部省入省。文部省初等中等教育局職業教育課長、広島県教育長、生涯学習振興課長などを経て、大臣官房政策課課長、大臣官房審議官を歴任。著書に「それでも、ゆとり教育は間違っていない」、「韓国映画ベスト100」、「2050年に向けて生き抜く力」など多数。

ほん・ひょじや ● 1968年神戸生まれ。マリスト国際学校卒、甲南女子大学大学院人文科学総合研究科心理・教育学博士前期課程（人間科学修士）。米国NYと韓国ソウル留学を経験。02年GIEC（Glocal & International Education Center）と舞子インターナショナル・プリスクールを立ち上げる。神戸市政策提言会議委員など、地域に根ざした国際交流・教育・市民事業に参画。

言葉で、新たな歴史を創るというミッションに対して、とてもやりがいを感じます。「あの先生の言った通りこの学校を選択しておいてよかったです」とか。ロングレンジは、もう大体、感謝されないわけですよ。子どもたちが大人になって40、50歳になつて感謝する気持ちが起つて、も、すでに先生は亡くなつている場合もあるわけです。でも、それが、一番大事なことだと思います。わたしたちの世代が死に絶えた後でも、今、ここに学んでいる子どもたちが60、70歳になつたとき、「KISに行つて良かった」と思つてもらえることが大事だと思います。